

特集 国際会議・核・原爆と表象／文学

——原爆文学の彼方へ——

特集にあたって

川口隆行

二〇一四年から原爆文学研究会では、科学研究費(基盤B)「核・原爆文学と表象／文学に関する総合研究」(研究課題番号・26294038 代表：川口隆行)と共催し、「戦後70年」連続ワークショップを開催してきた(W S I 「原爆文学」「古典」再読1——井伏鱒二『黒い雨』、W S II 「原爆体験の(表現)と(運動)」——60・70年代を中心に、W S III 「古典詩と現代詩の協奏——実作者を迎えて」、W S IV 「カタストロフィと詩」、W S V 「原爆文学」「古典」再読2——佐多稲子『樹影』、W S VI 「長崎原爆と復興の言説」、W S VII 「原爆文学」「古典」再読3——大田洋子『屍の街』、W S VIII 「広島から問う、「原爆文学」と「戦後70年」」。内容はすでに『原爆文学研究』13号(二〇一四年十二月)、同14号(二〇一五年一月)に掲載しているの

ならば、「戦後」再審という課題を、「原爆文学研究」の立場から行おうとするものであった。一つの「古典」作品や広島や長崎固有の話題を論じる際にも、核・原爆に関わる思想、表現、運動を冷戦期およびポスト冷戦期の国際的文脈からとらえ直そうとする姿勢は共有されていた。

本特集は、これらの議論を深める目的で、二〇一五年一月一日、一三日に開催された国際シンポジウム「核・原爆と表象／文学——原爆文学の彼方へ——」の内容について、全ての報告論文と特別講演を収録したものである。収録にあたっては、掲載の順番は当日と変えず、必要に応じて加筆修正を施している。当日のタイムテーブルについては、本誌巻末の彙報をご覧いただきたいが、まずは国際会議にあたって事前に案内した【趣旨説明】をそのまま記しておく。



※

一般に、原爆文学とは、1945年8月の広島・長崎の体験による文学を、のちには非体験者のそれも含みこんだ、日本文学の特異なジャンルと見なされてきた。しかしそうした見方は、広島・長崎に限定された経験を描いた「当事者」の文学として押し込め、あるいは、戦後日本という空間において原爆の悲惨さを伝えるもののみとして利用されることにもなった。こうした困い込みから原爆文学の解放の可能性を探るにはどうしたらよいのか。

【セッション1 移動する原爆—文学】は、原爆体験や記憶の移動、受容、変容という問題を通して、原爆と文学の関係をあらためて議論する。ある言語で書かれた文学が、翻訳や流通を通して、別の国や言語へテキストが移動する際に、どのような文学的・思想的反響や展開があったのか。さらにそれは原爆体験や記憶にどのような新たな意味を生みだしているのか。

核廃棄物貯蔵施設のある台湾・蘭嶼に住み、反核・先住民運動と創作活動を続けるシャマン・ラボガン氏の【特別講演】は、核や原爆と文学の関係についてさらに深い問いかけをもたらすだろう。

【セツション2 原爆を視る】は、映画、写真、絵画などが生み出す表象、メディア性を議論する。字義的に原爆文学を解せば、それは言語表現を意味する。しかし、「文学」と「非文学」の境界はどこにあるのか。文学というメディアが生み出すイメージやメッセージは、異なるメディアとどのような交渉や関係をもち、どのような新たなイメージやメッセージを生み出したのか。

核や原爆が、文学や視覚表現などで具体的にどのようなように表現され、受け止められたのかという議論はもとより大事だが、ある空間において、個人や集団が心のなかで思い描き、保持し、更新する「物語」というレベルにまで議論を拡げる必要がある。文字や映像で語られる、あるいは日本語、英語、中国語、韓国語で語られるといったこと、そこで起こる出来事を含めた文化事象全体を論じる視座としての「想念のうちなる核・原爆物語」、認識枠組みとしての「メタ原爆文学」である。こうした問題と関わるのが、「ディスコース」(言説)である。

【セツション3 冷戦文化と核】は、国際的な地政学を踏まえ、冷戦期における核をめぐる言説とその布置、それを介しての文化や社会のありようを議論する。「想念のうちなる核・原爆物語」をつくりだすディスコース、それらを含めた空間のディスコースの問題を前景化することは、原爆文学を支えてきた枠組みをとらえ直すことにもつながるのではなか

ろうか。

原爆文学とは、1945年8月の惨劇とそれに続く現代という時代に向き合うために、先人たちが発見した世界認識の方法をめぐる仮構意識といつてもよい。だからこそ、これまでも不断にそのありようを問い続け、問われ続けてきたのであって、いずれもっと大きな認識の方法、意識の回路を見つけることができれば、原爆文学という言葉それ自体は手放される日が来るかもしれない。核や原爆にまつわる表象／文学は、どのような歴史的、社会的条件のもとで生み出され、読まれ、位置づけられたのか。それに関わった多くの人たちは何を思い、生きてきたのか。それらを議論することは、原爆文学という言葉の彼方に位置する無数の存在を含みこんだ、「私たち」のありように思いをめぐらすことにもなるだろう。

※

若干、説明を加えておきたい。

【セツション1 移動する原爆—文学】には、島村輝「投下する「側」の「記憶」——二〇一五年・日本からの再検証」、齋藤一「核時代の英文学者——Hermann Hagedorn, *The Bomb that Fell on America* (一九四六年)の日本語訳(一九五〇年)について」、松永京子「ジュラルド・ヴィゼナーの『ヒロシマ・ブギ』における原爆ナラティブの軌跡——大田洋子と「ネイティブ・サヴァイヴァンス」をめぐる——」を収めている。島村論文は、写真家・

新井卓の映像作品「49 Pumpkins」や堀田善衛「審判」、イーザリー／ギュンター・アンデレス『ヒロシマわが罪と罰——原爆パイロットの苦悩の手紙』を取り上げ、原爆投下をめぐる視点と感覚の非対称、それが喚起する想像力の問題を論じている。齋藤論文は、ハゲドーンの原爆投下を批判した詩作品の背後における日米のネットワーク、日本側の受容の問題、GHQの文化政策とのかわりについて論じている。松永論文は、北米先住民作家ジョーラド・ヴィゼナーの作品に、大田洋子受容を介しての「平和」言説の脱構築の可能性と限界を論じている。いずれの論文でも問題にされているのは、被害者／加害者の問題とかわる視点の「非対称性」、「平和」言説の欺瞞性といった問題であろう。

【特別講演】のシヤマン・ラポガンは、一九五七年台東県蘭嶼郷紅頭村生まれ。タオ（ヤミ）族。中学を卒業後、台湾本島の高校に進学。淡江大学フランス語文学科に進学、卒業後は台北でタクシードライバーになる。蘭嶼に放射性廃棄物貯蔵施設の建設計画がもちあがると反対運動に参加、一九八九年に家族とともに蘭嶼に帰り、タオ族の伝統的な舟造りや漁を学びながら創作活動をはじめた。邦訳作品多数。みずからの作品を「海洋文学」と位置づけ、核の問題を直接扱うことはなかったが、自伝的長編小説『大海浮夢』（二〇一四）や『安洛米恩之死』（二〇一五）では放射能汚染や反核運動にも触れている。シヤマン・ラポガンについては、拙稿「『海の歌』が響き渡る場所——『原子爆弾の記録——ヒロシマ・ナガサキ』と蘭嶼」（『現代思想』四四卷一五号、二〇一六年八月）にも本特集と関係する内容を記したので参照いただきたい。シヤマン・ラポガンに【特別講演】を依頼したのは、広島・長崎

と同じ核の当事者というからだけではなく、彼の話と突き合わせるようにして、広島・長崎の経験やその言説を考え直したかったからである。

【セツシヨン2】には、野坂昭雄「原爆写真というメディアと〈詩〉」、紅野謙介「『キノコ雲』と隔たりのある眼差し——戦後日本映画史における〈原爆〉の利用法」、マイケル・ゴーマン「核の不安から核の無関心へ——アメリカの大衆文化における核イメージの変容——」を収めている。野坂論文は、長崎原爆を撮影した山端庸介の写真を取り上げ、その受容のプロセスにおいて、写真に写し込まれた「出来事そのもの」から遠ざけられる危険性を論じている。紅野論文は、特に映画「仁義なき戦い」の「キノコ雲」の表象に注目して、表象不可能な出来事を「代用」という方法で歴史の語りに組み込むことの危うさと同時にその可能性を論じている。ゴーマン論文は、冷戦初期から現代におけるアメリカ・ポピュラーカルチャーについて、「精神的無感覚」という私たちの核否認、核イメージの消費を論じている。いずれの論文でも改めて確認されるのは、「出来事そのもの」を表象し、理解する困難と可能性であろう。

【セツシヨン3】には、アン・シェリフ「核と自由——1960—1970年代の日米における公民権／反戦／反核運動——」、山本昭宏「カサ」の下の「理想」と「現実」——一九六三年く六七の論壇での議論を中心に——、林泰勲「1960年代韓国の原子力プロバガンダにおける『学生科学』の位置」を収めている。シェリフ論文は、冷戦期にベ平連が開催したティーチ・インにおいて世界的市民運動における共通の概念として「人権」を見出すプ

ロセスを論じている。山本論文は、一九六〇年代の国際政治学者や文学者・文化人の「平和」に関する言説の布置を分析し、現在に至る「理想」と「現実」の乖離を論じている。林論文は、六〇年代韓国で刊行された『学生科学』を分析し、核兵器への恐怖と原子力技術の平和利用といった典型的なフレームづくりに果たした役割を論じている。まったくの偶然であるが、いずれの論文も一九六〇年代を中心に、冷戦期の言説編成の複雑さを問題化している。

【趣旨説明】に掲げた目的が、先行する連続ワークショップを含めても本特集掲載の論文で達成できたというわけではない。そもそも国際会議といつても地域的偏りもあり、個別具体的議論は少ないかもしれない。しかしながら、それは同時に今後の課題のありかを示しているとも言えよう。「原爆文学」という狭い間口を通して、世界はどう見えるのか。それを現在の問題としてどう議論したらよいか。今後さらに個別的研究をもちより、さらには理論的探究を深めていく実践の場として、本誌『原爆文学研究』が発展するはずみとなればと考えている。また、本特集を含めて一五年以上に及ぶ原爆文学研究会の活動と冒頭に記した科学研究費の成果については、二〇一七年前半刊行予定の『読む原爆文学事典』（仮称、青弓社）に反映する予定である。この本は、「原爆文学」をジャンルや地域の越境、横断を不断に繰り返しながら再構築されるものと仮説的に位置づけ、その名のもとに、核・原爆に関する文学・文化の堆積を批評的に浮かびあがらせることを狙いとし、アクチュアルな問いを喚起し、世界の見方に更新を迫り、

「戦後70年」以後の公共的議論に有益な言説資源を提供する内容となるよう執筆、編集に取り組んでいるところである。

最後に、本特集が、寄稿された方々はもとより、今回収録はかなわなかったが国際会議の議論を盛り上げてくれたコメントーターの方々（吉田裕、中野和典、高野吾朗、鷺谷花、岡村幸宣、市川浩、高榮蘭）、翻訳・通訳に携わってくれた方々（李文茹、永川とも子、林慶花）をはじめとした多くの関係各位の熱意と協同によって可能となったことを記しておきたい。

付記

国際会議の様子については、毎日新聞（二〇一五年二月一三日）、中国新聞（二〇一六年一月七日）、西日本新聞（二〇一六年二月一二日）で報道された。中国新聞については、「未来に向けて人文学の可能性を開く挑戦」を取り上げた連載「人文学の挑戦」の第一回として大きく扱われており、同新聞社ヒロシマ平和メディアセンターのHPで現在も読むことができる。ぜひ参照されたい。<http://www.hiroshimapeacemedia.jp/?p=55372>

- ◆ 報告・講演
- ◇ コメント
- 司会
- 翻訳
- 開会閉会の辞



○■3 川口 隆行



■1 中谷 いずみ



◆1 島村 輝



◆1 齋藤 一



◆1□2 松永 京子



◇1 吉田 裕



◇1 中野 和典



◆ シヤマン・ラボガン



■□ 李文茹



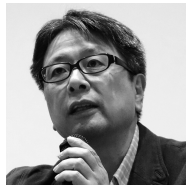
◇ 高野 吾朗



■2 楠田 剛士



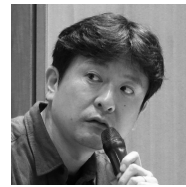
◆2 野坂 昭雄



◆2 紅野 謙介



◆2 マイケル・ゴーマン



◇2 岡村 幸宣



◇2 鷺谷 花



◆3 アン・ジェリフ



◆3 山本 昭宏



◆3 林 泰勲



□3 林 慶花



◇3 市川 浩



◇3 高 榮蘭



○ 長野 秀樹

※会次第は巻末彙報欄を参照